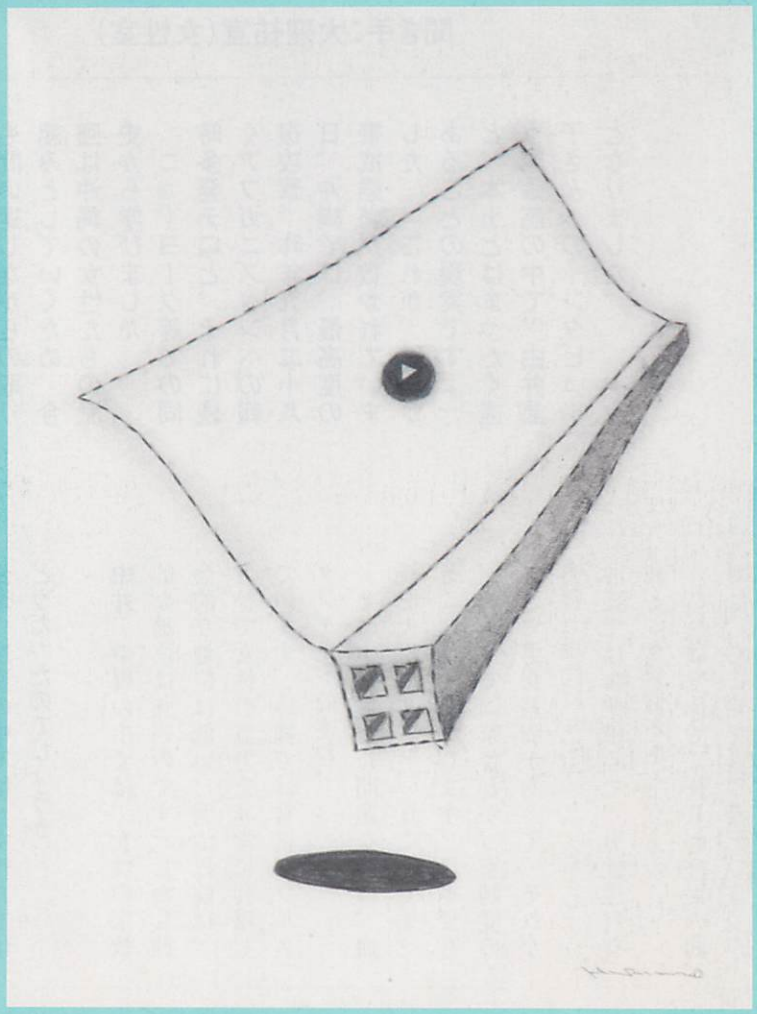


女性室広報誌

あいあう

2002・7　第12号

＜インタビュー＞　沖縄の女性たち
ー女性の人権と平和運動ー　由井晶子さん

＜座談会＞　男女両性で形づくる教団にむけて
ー本廟奉仕・教師修練の現場から（下）ー

＜報告＞　女性室公開講座
いのち・あいあう　宗正元さん・森崎和江さん

＜教区のうごき＞　富山教区

インタビュー

由井晶子さん
（元沖縄タイムス編集局長）

沖縄の女性たち
－女性の人権と平和運動－

聞き手：大窪祐宣（女性室）

男女共同参画。男と女がどこに向かって、何を実現するための共同参画なのか。そのことをいつも問い返しながらの取り組みとしていくため、今回は沖縄の女性たちの歴史から学びました。

ニューヨーク等での同時多発テロと、それに続くアフガニスタンへの報復攻撃。昨年九月二十八日、沖縄では、最高度の警戒態勢が敷かれていました。「これが、基地があることの現実ですよ」と、本土とはまったく違う緊張感の中で、由井晶子さんへのインタビューとなりました。

慣習の中の女性たち
－トートーメー（位牌）問題－

――今日は大まかに申しまして、「沖縄の慣習と女性たち」という視点、もう一つは「戦争と基地と女性たち」という視点でお話をお聞かせください。沖縄の伝統的な生活、慣習の中では、女性たちはどうだったのでしょうか。

由井　慣習の中では、女性の宗教的な地位は強いのです。しかし社会的な地位は低い。明治以前は、大枠で女性の霊力を非常に利用しています。沖縄では常にダブルスタンダードですね。

その中で非常に問題なのは、血統を大事にするということです。そこに特色があります。日本でも旧民法下では家督とか、家制度のもとで男女差別があって、それが慣習上現代にも生きているでしょう。沖縄では血統中心で、男性絶対有利という習慣があるのです。

これは全体的に貧しい庶民の間では、あまりなかったという説が有力なのですが、琉球王国時代の中部では、男の血筋だけが家系を継ぐシステムができていました。これが明治の旧民法とドッキングして、現実社会では家父長的なのです。

家督を相続するために、日本の一般社会では男の子がいない場合は娘に婿を取ったでしょう。これは沖縄では別の血筋だということで許されなかったのです。そうしますと、〝お妾（めかけ）さん〟を持つ、余所（よそ）で子どもをつくるわけです。それが先祖への供養だということで、女性たちの地位が脅かされてきた。男の子を産まない限り、女の子を何人産んでもダメなのです。離婚されたり。

そして、祭祀権と財産権が一体になっているのが「トートーメー」です。このことが戦後三十年もして、八十年代になって慣習上の女性差別の問題として激しく燃え盛りました。

売春問題

由井　それといっしょに売春問題が出てくるのです。終戦直後は、

由井さん

interview

地上戦のあった世界中どこにもあるようなひどい状態でした。一九五一（昭和二六）年九月八日に、いよいよサンフランシスコで対日講和条約と日米安保条約が調印され（一九五二年四月二十八日発効）、日本は独立して戦後の混乱から立ち直ります。女性の人権問題も少しずつ確立していきます。けれども、逆に沖縄の場合は、日本が独立すると同時に、基地が移される。それから、基地の街で管理売春が盛んになっていきます。

本土では、駐留軍相手の売春問題は一九五三年ぐらいまでで、変わっていくわけでしょう。五三、五四年頃から売春そのものへの批判が高まって、一九五八（昭和三三）年に売春防止法ができるわけです。売春問題は人権問題として、キリスト教、宗教関係者の長い長い取り組みがあり、それが一九五八年に実を結びました。

沖縄は、逆にその時点で、歓楽街がいよいよ繁栄していきます。ベトナム戦争も起きまして、女性の人権侵害が逆に進んでいったというわけです。売春問題についてはもうお手上げという感じでした。一九六一年になって市川房枝さん（当時、衆議院議員）が沖縄にやってきて、かつて芽が潰された女性運動としての売春防止運動が再生します。そして十年がかりでやっとこさ、一九七〇（昭和四五）年、売春防止法を立法院で成立させたのです。

その頃に「股間産業」と、自虐的な言い方がありました。基地経済の一つの産業とみなされていたのです。五十年代には、経済統計の対外受け取りの中に「特殊婦人」というのがあるんですね。彼女たちが稼ぐお金が経済収入にカウントされていました。併せて、〝混血児〟が深刻な問題になってきました。

うないフェスティバル

由井　沖縄の女性たちの運動の中で、持ち前の生活力の強さであるとか、動物的であるとかという強さは、男性の展開する復帰運動の先頭役をつとめるときにも発揮されました。やがてその強さと社会的発言とマッチさせていったのが、基地被害の問題です。それは、沖縄から一つのメッセージを日本にも世界にも発信するというだけの力を持ったと思います。これが爆発的に発揮されたのが一九九五（平成七）年九月の少女レイプ事件のときです。

戦後実にたくさんの米兵によるレイプ事件があったのですが、沖縄の基地問題は女性の人権の問題ですよという視点から言い出したのが、八十年代のフェミニズムの運動から出発してきた女性たちです。彼女たちが八十年代半ばから取り組んで、十年ぐらい経って、はっきりと運動として固まっているときに、あの事件が起こりました。今私は「うないフェスティバル」の座長をしていますが、この女性たちの運動はここを起点としているのです。

――「うないフェスティバル」とは？

由井　「うない」というのは沖縄の古語で、姉妹、シスターという意味です。「うぃきー」というのが兄弟、ブラザーです。女性たち

が手をつなぎ、男たちともいい関係を結び、平和な社会を築こうということで「うないフェスティバル」と名づけられました。

第一回が一九八五年の十一月です。今は、同実行委員会、那覇市、沖縄タイムス社が主催して、毎年秋に行われています。実は、私は新聞社をリタイヤした一九九七年第十二回から初めてかかわったのです。東京が長かったもので、創設当時は遠くから見守って支援していました。

【うないフェスティバル】
平和を基調に男女平等社会の実現やあらゆる立場の人々の共生を目指して、個人、グループ、組織、それぞれの自己表現とネットワークづくりを目的としています。講演会、討論会、展示、舞台発表などを通じて、いろんな人たちが男と女、国籍、世代の違いを超えて集います。
（那覇市のホームページより）

基地問題と女性

――基地問題と女性ということで、お話を続けていただきたいのですが。

由井　国連の人権小委員会で、女性問題を扱う作業部会がございますでしょう。初期には、キリスト教関係の方が中心だったと思います。世界的な買春問題であるとか、慣習上の女性の人権侵害の問題、インドの女性やイスラム教の女性たちの人権侵害の問題、さらにはアフリカ、中近東、アジアで広く行われている女性の「割礼」（女性性器切除、FGM：female genital mutilation）の問題とか取り上げられています。

一九九三（平成五）年六月にウィーンで開催された第二回世界人権会議では、「女性の権利は人権である（Women's Right are Human Right）」と宣言されて、「女性に対する暴力の撤廃」がメインテーマになりました。それが一九九五年八～九月、北京で開催された第四回世界女性会議につながっています。

国連の機関、国際的なネットワークで、それ以前は仕方のないものと見過ごされてきた、戦争状態におけるレイプも戦争犯罪だという議論が出てきます。

沖縄でも、そういう国際的な動きを取り入れて、平時においても長期にわたる外国軍隊の駐留と、それが及ぼす女性・子どもへの人権侵害、それも戦争犯罪だという理論を組み立てました。

そして、北京での第四回世界女性会議に、「うないフェスティバル」出身の女性たちを中心に、「NGO北京95フォーラム沖縄実行委員会」をつくり、高里鈴代さんを団長に乗り込んでいって、NGOフォーラムで、基地問題（「沖縄における軍隊・その構造的暴力と女性～武器によらない平和の実現を～」）とトートーメー問題のワークショップを開いてアピールしました。

トートーメー問題を外へ持っていくと、韓国や東南アジアで、まったく同じではないけれども、同じような慣習上からくる女性の人権侵害の問題が出てくるわけです。沖縄の問題も一つであるということで、この二つを柱にして北京会議に持っていったのです。

北京会議では、基地問題と基地から生じる女性への人権侵害問題を通して、沖縄の女性たちのグループとアメリカのいくつかの市民運動とがドッキングしました。

アメリカでも、軍隊の中におけるセクハラ問題があり、この問題と結びついた。韓国でも米軍の基地被害の問題が深刻で、韓国の女性たちとも結びついた。アメラジアン（AMERASIAN、アジアに駐留した米軍人と地元の女性との間に生まれた子ども）問題を通して、フィリピンのグループともつながりました。

そして、北京会議の終わる頃に米兵による少女レイプ事件が起こりました。それまで積み重ねてきた、そして発展させてきた運動があるものですから、北京から帰ってきた女性たちがすぐそれに対応し、アピールしました。

そのとき、女性全体としては結束できなかったのです。地域の婦人団体である「沖婦連（沖縄県婦人連合会）」と、職能団体とか労働組合が入っていた「婦団協（沖縄県婦人団体連絡協議会）」、そして無党派の若手の人たちの「NGO北京95フォーラム沖縄実行委員会」、この三つの団体が一緒に行動するには至らなかった。

北京実行委員会の方は理論的にしっかりしているのでマスコミが

そっちばかりに集中するものですから、五万人の組織力を誇る沖縄県婦人連合会の会長さんが、我々のような大組織と、たかだか二十数人のあなたたちといっしょにやるわけにはいかない、と言ったのです。結局、全体としてのアピールができなかった。かえってそれが功を奏しました。三日間、毎日まいにち、三つの団体がそれぞれ違う形で抗議行動をやったのです。むしろそれが県民の各層にアピールしました。

レイプ事件の二重被害へのケア

由井　それからもう一つ大事なことなのですが、それまで沖縄では、米兵による中高校生のレイプ事件など、ご本人たちを抜きにして、大きな政治問題にしてしまっていたわけです。そうすると、当事者たちは、たまったものじゃない。自分たちへのケアはしないで、政治問題にされて、しょっちゅう新聞に載る。そのたびに理解のない周囲の好奇の目にさらされる。

　これがどんなにひどかったかというと、一九九五年九月の事件のときに、「由美子ちゃん事件」というのがしょっちゅう引き合いに出されました。これは一九五五（昭和三十）年に起こった六歳の少女への強姦殺人事件で、沖縄の人権問題への取り組みの最初でした。そういう事件はいっぱいあったのですけれども、わずかその一週間後に「Sちゃん事件」という幼女レイプ事件が起きました。この事件で被害を受けた子どもは生きているのです。ある時期まで、この「Sちゃん事件」は「由美子ちゃん事件」と並んで年表などに記載されていたのです。けれども、ある時期からあらゆる記録から抹消されました。ご本人や親族が辛い目に遭って抗議がきたのでしょう。

　「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」では、五十年も経って、過去の事件をいろいろ調べて、年表式に被害の状況をまとめて、「戦後・米兵による沖縄女性への犯罪」という資料を作っています。これをアメリカに送ったりもしました。

　一九九五年の事件のときには、女性の人権を確立しようという世界的な流れの中での時期でしたので、竹下小夜子さんという精神科のお医者さんが被害にあった少女をしっかりケアしました。竹下さんを中心に高里さんたちが「強姦救援センター・沖縄（REICO）」を作ったのです。一方では抗議と意識改革運動をしながら、一方では被害者へのケアのシステムを作る。全国からお金も集まり、事件からすぐの翌十月には発足しました。その子には、今でも精神科のお医者さんやケースワーカーグループがずっとついています。

人権運動と平和運動

――沖縄の女性たちの運動は、人権運動と平和運動がいっしょだと言うのですね。そこが本土とは違うなと思います。

由井　一九四五（昭和二〇）年に戦争が終わると、人々は今テレビに出るアフガンやアフリカの難民のようになりました。一九四六年やっと難民収容所から自分の村に帰りました。ゼロから出発して徐々に復興しますが、一九五〇年頃まで、沖縄の社会そのものが荒れていました。

　戦争をみんなが経験したものだから、戦争経験を語るのも、考えるのも嫌というところがあったらしくて、我々のように疎開先から引き揚げてきた者は、十分にはそのひどさを知り得なかった。今になって気がつくのですけれども、ナガサキ、ヒロシマについて書かれたものを読んで感動したのですが、身近な沖縄の戦争については、そんなに重大に考えなかったところがあったように思います。子どもでしたから。

　沖縄戦の体験をただ私的に語るだけじゃなくて、平和の運動としてとらえたのが五十年代前半。さらに基地の存在と重ね合わせたのは、五十年代後半から六十年代になってからでしょう。これが強く出てきます。そして七十年の復帰の頃は、今度はただ戦争は嫌だということよりも、戦争を起こしたのは誰か

ということ、日本軍が何をしたかということが議論になりました。これも一部では語られてはいたけれども、正直言って、六十年初めまでは、日本軍のひどい行為はあまり大っぴらには語られなかった。体験者が七十年代になって語り始めた。

それから十年経って八十年代、また今まで黙っていた人たちが語り始めました。きっかけは一九八二年の「歴史教科書問題」です。中曽根首相が出てきて、日本が右傾化して行きますでしょう。あの頃にもう一度沖縄の運動が盛り上がりました。世界の情勢と日本の政治状況と沖縄の平和運動はいつも関わりあっています。

復帰運動史の中で、女性の人権は語られなかったじゃないかということが、八十年代後半に出てきます。女性の側から、米支配下の沖縄の人たち全体の被害については言うけれども、内部ではどうだったのか語られなかったじゃないか。それは復帰運動の大きな欠落ではないか、と言われ始めたのが、八十年代後半から九十年代です。女性の人権の視点からの平和運動が力を持ち始めました。

——今は、ニューヨーク等での「同時多発テロ」事件の余波を受けて、沖縄の米軍基地にも緊張が走っているでしょうね。

由井 ブッシュの対テロ戦争宣言以後、米軍も強気になっていますからね。ますます女性たちががんばらなければいけないということで、昨日（二〇〇一年九月二十七日）も女性たちがアフガン戦争反対の抗議声明を出しました。

一方で、基地問題を一つのきっかけにして、去年あたりからDV（ドメスティック・バイオレンス）に対する関心が高まっています。とにかく暴力にしっかり向き合おうという動きが盛んです。

——最後に何かございましたら。

由井 沖縄の中で戦争があったこと、そのために女性たちが受けた悲惨なこと、日本政府がかかわって沖縄の逆境を深めたこと。

最近になって思うのですけれども、復帰運動をしていた一部の人たちが、一九五一年に対日講和条約が結ばれたとき、「潜在主権」が残ったのはよかったと言いました。潜在主権というのは、沖縄は本来、日本の国土であるということを認めたということです。潜在主権があってそこに住んでいる人間は日本人ではあるが、しかし、この土地はアメリカが基地自由使用のため必要とするので、国連の信託統治を米国が提案するまでの間はアメリカが立法・行政・司法の施政権のすべてを持つと。国連の信託統治にいつ提案するかはわからない。

確かに潜在主権は顕在化して、沖縄は日本復帰を果たしました。沖縄がそれを望み、激しい運動をしたからです。女性もがんばりました。でも、「基地を米国に使わせる」という基本は少しも変わっていないと思いますね。

——今日は、沖縄の女性たちが平和と人権とをきちんと見すえた運動に取り組んでいる、そのことに私たちは学ばなければいけないということを強く感じました。

由井 沖縄でも、こういう厳しい状況になってくると、いよいよ女性たちが人々に訴え続けていくことが大切だと思いますね。

——ありがとうございました。

今回はインタビューの一部分を掲載いたしました。後日、資料集として全文を紹介する予定です。

由井晶子（ゆい・あきこ）
一九三三年（昭和八年）生まれ。一九五五年に早稲田大学を卒業し、沖縄タイムス東京支社に入社。一九九一年から一年半、編集局長を歴任。顧問を経て一九九七年退社。琉球大学で講師として「マスコミと女性」のテーマで講義。現在「うないフェスティバル」の座長を務め、『那覇女性史／なは・女のあしあと』（那覇市総務部女性室〔現・男女共同参画室〕那覇女性史編集委員会編）の編纂にもかかわる。

男女両性で形づくる教団にむけて

座談会

―本廟奉仕・教師修練の現場から（下）―

出席　上杉彰子さん（教師修練スタッフ・小松教区）
石川正穂さん（教師修練スタッフ・富山教区）
伊藤敏暁さん（同朋会館教導・金沢教区）
見義悦子（同朋会館教導・女性室スタッフ）
司会　松本良平（女性室スタッフ）

前号に引き続き、「男女両性で形づくる教団にむけて―本廟奉仕・教師修練の現場から―」と題して、教師修練スタッフや同朋会館教導・補導としてかかわっておられる方々による座談会を掲載いたします。

それぞれの場に女性が加わることによって何がどう変わってきたのか、あるいはどのような問題が見えてきたのかを話していただきました。

女性と男性がともに声を出し合うことの大切さと、「男女両性で形づくる教団」の実現に向けた取り組みの課題を明らかにしたいと願っています。

本廟奉仕

親鸞聖人の教えを聞いておられた人びとは、聖人が亡くなられた後、折に触れて集われ、念仏の教えに出遇われた喜びを確かめられました。その場所が東本願寺の源流であり、今も門徒は、東本願寺を"真宗本廟"として大切にしています。

本廟奉仕は、現代社会に生きる私たちが、その真宗本廟に集い、そのような生き方をされた先輩たちに学んでいこうとするもので、境内にある同朋会館を会場としています。全国各地から集う人々は奉仕団と呼ばれており、境内の清掃や座談会を中心として、寝食をともにしながら一泊二日または二泊三日の日程を過ごしています。

本廟奉仕の場で

―教師修練に続いて、同朋会館の本廟奉仕の現場で、女性の教導として感じておられることをお話しいただきたいと思います。

見義：はじめて同朋会館教導を担当した時から感じているのは、奉仕団に参加する女性が座談会などで話される内容に、女性であるがゆえにでてくる悩みや問題がすごく多いということです。これまで、そういう女性の問題を、男性の同朋会館教導・補導はどのように聞き、何を語ってきたのだろうかと思いました。

座談会で、女性の本音を聞いた男性が、「そう言われると、あの時のうちのかあちゃんの言葉はそういう意味だったんだね。家に帰って、かあちゃんに謝ろう」と発言されたこともありましたが、これまで意見を語る場が、男性だけのものであったことの影響はすごく大きいと思うんです。

ですから、奉仕団との関わりでいえば、教導が男性なら女性が補導を、教導が女性なら男性が補導を、というかたちをめざすべきだと思っています。お互いに気づきあえることも多くなると思います。

それから、女性の教導だから話しやすいということもあると思うんです。最初は、「なんだ女か」という視線を感じることも多いのですが、自分の生き方のすべてをかけて語るしかありません。でも、その姿勢が通じたら、逆に、「男の先生にはこんなことまで言えないけど…」と飾らない言葉が聞けるということもあります。

―何人かの同朋会館補導さんからは、女性の教導さんと組んで奉仕団を担当して、「肩肘張らずに語れる」「身体で感じたことから話をされているという印象がある」という意見がありました。今後も女性の参画は進んでいくと思います。

伊藤：ただ、女性であるというだけで「お前みたいな者に何がわかるんだ」というような視線を感じるという女性の教導さんの経験談を聞いたことがありますね。

見義：同朋会館に限らず宗門のさまざまな場において、現在、その中心にいるのは男の人ですから、女性の参画をめざすという時には、その中心にいる人たちの視野に女性が入っているかどうかが大きいわけです。視野に入っていないと女性は参画のチャンスを奪われてしまうのが現状です。

石川：かつて教区駐在教導をしていた時に、同朋会館補導さんの候補として女性を探しましたが、「この人は」と思ってお願いしても断られた経験があります。現実はなかなか難しいですね。

見義：女性もスタッフとして関わろうという思いを持って「出る練習」をする必要があるのかもしれませんね。

石川：先程、男女が同じ割合で同朋会館教導・補導に関われないかという提案もありましたが、うちの場合を考えてみたら、つれあいが子育てや家事を主体にしてくれている結果、私は出やすい状況にさせてもらっているんですよ。だから、一概に「出る練習」といっても難しいですね。それは私がそういう状況を作っていないからなんですけれど。

伊藤：実際、家事の一つひとつは、ものすごいエネルギーが必要ですから、現にそれを担っている女性が出ていくとなると、家の中はたいへんですよ。

上杉：結局、その時に家族の在り方が全部影響してきます。私の場合は、自分の意志を通してしまうんですけど、いかなる風当たりがあろうと決断していくっていうエネルギーは必要になってくるんじゃないでしょうか。

伊藤：でも現状において、女性は、どこでどう生きていくかというところまで経済設計がないかぎり、なかなか踏ん切りがつかないと思いますね。

問われる寺のあり方

見義：宗門における女性の参加ということで、もう一つ言えば、お寺に関わりがあったとしても、仕事をしたり、結婚することで寺を離れるということが、どちらかというと女性の方に多くあります。寺に所属してはじめて教団と関われる状況がありますから、女性は教団から遠くなることが多いと思います。

―宗門では寺が単位となることが多いですから、寺を離れた瞬間に自らの意見を表現する方法がなくなってしまうということですね。

石川：確かに僧侶には所属寺ということが、いつもついてまわりますね。

上杉：例え、僧侶には所属寺など関係ないと言っても、現実にはそれを失えば、居場所がありません。そういう時に、宗祖が〝非僧非俗〟とおっしゃったことはどういうことなのかと切実に思いますね。

だから、真宗同朋会運動って言うけれど、同朋の一番はじまりは誰と誰なの？と聞いてみたくなります。自分の妻や夫との関係や、子や姑との関係が本当に「御同朋」と言えるのか。その第一歩が見失われたところでいくら運動と言って取り組んでも、お互いに尊敬し合うような関係は生まれてこないと思うんですね。

真宗のお寺っていったい何なのでしょうね。ひょっとすると、既存のお寺という形を〝こんなもんだ〟という固執した考え方で守ることによって、逆に排除するものを生んでしまっているのではないかと思うんです。

伊藤：寺という形で表そうとしてきたものはあるのでしょうが、現状は真宗のお寺とは言い難いでしょうね。

依存する関係から共存する関係へ

—そういう意味では、本廟奉仕の二泊三日は、あらためて自分自身が「御同朋」という教えに背いて生きていることを問いかけられる場であると言えますね。その問いかけのなかに、男性の教導・補導のみで本廟奉仕を担ってきたことの問題性も見えてくるわけです。常に意識し続けなければならないのは、「男性だから、女性だから」という形で、腰をおろし、固定化していないかということではないでしょうか？

最後に、今後、宗門のさまざまな場に女性が、かかわることができる環境を作り出すうえで課題となることは何だと思われますか。

見義：最近、女性だけで出仕するという法要が教区等からのニュースになりますが、私はそのことで女性の地位が認められたという評価をするなら、それはちょっと違うんじゃないかということを思っているんです。

先程も出ていましたように、〝御同朋御同行〟ということを確かめながら、男女両性での取り組みにならなければいけないと思っているんです。

もし、「女が参加できなかったところにこれだけ入った」というような事象だけで場を開いたこととして、お互いの眼差しを交わし合うことがなくなってしまうならば、それは問題じゃないかと思うんです。

石川：せっかく両性が入っても広がらずに複雑化、専門化していくということであれば問題だと思いますね。

伊藤：同朋会運動がはじまった当初からみると、違った意見を持つ者がとことん語り合う場がなくなってしまったという教団の状況もあります。教団の中でさえ一人ひとりが冷たい関係になってしまっているんじゃないかと思うんですよ。

上杉：私は男であれ女であれ、〝いのち生きるもの〟としてその存在を認め合い、尊重しあい、共にいのちを守る側に立ち続けられたらと思います。

お互いに現代社会で傷つき、痛み、苦悩している者どうしなんです。男女が依存する関係から、共存する関係へ向かう取り組みが、「男女両性で形づくる教団」を具体化するのでしょうし、さらには、御遠忌テーマとなった〝差異（ちがい）を認める世界〟を具体的にするのだと思います。

見義：少なくとも住職と坊守はお互いの足を引っ張りあうような、男と女の関係であってほしくないという思いがあります。

—今日は、多岐にわたり、いろんな問題提起をしていただきました。それは、私たちが生きていく上で、あたり前の課題なのに、何か特別のことになってしまっているのではないか。そういう意味で、私たちが身を置いている場そのものを、もう一回見直してみるということの大切さをあらためて思いました。今日はありがとうございました。

（二〇〇一年九月二十六日）

女性室公開講座

女たちと男たちの寄り合い談義

―いのち・あいあう―

私たちが日々の生活を生きるという時、それは、つきつめていくと、人と人とが出会うことだといっても過言ではありません。

今回の女性室公開講座―女たちと男たちの寄り合い談義―では、今一度原点に立ちかえり〝いのち・あいあう〟というテーマで、ひたすらにいのちの言葉を探し続ける森崎和江さんと、親鸞聖人との出遇いによって、凡夫の身に与えられているいのちにうなずいたと語る宗正元さんにお話をしていただきました。

男であれ、女であれ、かけがえのない一人の人間として、本当に〝値遇〟ということがどういうことなのかを、それぞれ語っていただきました。

凡夫の身に遇う

宗　三十歳の頃まで会社勤めをしたり、労働組合運動や平和運動などをしており、親鸞に縁のない生活をしていたんですが、たまたま体を壊し静養していた時、「自分は今まで何をしてきたのか」と考えさせられるようになり、偶然にも、親鸞聖人の道を歩いておられる人々に出会ったんです。そして、やがて私も親鸞に出遇うことになり、私自身が凡夫の身であるということに初めて出遇った。このことは私にとって、生涯を決定する出遇いでした。そして、「なんまんだぶつ」と名告り出てくるいのちと共に生きる人を通して、与えられたいのちに少しずつうなずけると言いますか、いのちに遇う生活が始まったように思います。

「なんまんだぶつ」と名告り出るいのちとは、どんないのちなのか。これまでに気がつかせていただいたのは、「生老病死」という言葉で言い表されるような、老いや病気や死に対してであれ、どんな人であれ、平等に手を合わせ、受けとめていくいのちです。「いのち」は、古語辞典によると、「い」は「息」、「ち」は勢いを表す言葉です。つまり、生きる根源の力ということです。

ですから、いのちに遇うとは、人生の原点、生活の原点、出発点に遇うということでしょう。絶えずそこに立ち返り、出直していく。森崎さんの言葉で言えば「生き直す」。よく、「いのちは大事」「いのちは尊い」と言われますが、私たちはいのちに出遇わないで、口先で言っていることが多いですよね。「なんまんだぶつ」と名告り出るいのちは、特殊ないのちのように思えるかもしれませんが、それは私たちの日常生活の中に根をおろしているようないのちです。

私たちは、そのいのちをなかなか受けとめることができず、迷っているわけです。いのちとの出遇いは生涯出遇い続けていくことであり、出遇い尽くせるものではないわけです。

生まれ出てくるいのち

今年、友人がガンで亡くなりました。二年半の闘病生活を送りながら、親鸞聖人と共に歩み続けていかれた方でした。その方が「明日終わるかもしれない、今日で終わりかもしれないと、いつも不安な気持ちでこれまで生活してきたけれど、ふと気がつくと、そういう不安な身がいのちの限りを尽くして生きてくださっている。それがいのちなんだなあ」と。そのことを、昔の人は「阿弥陀の御いのち」と表現しています。「知らざるときのいのちも阿弥陀の御いのちなりけれどもいとけなきときは知らず」と。

「なんまんだぶつ」と名告り出るいのちとは、どんなことも受けとめていくいのち

宗 正元さん
（そう しょうげん）

1927年生まれ。真宗大谷派
日豊教区宇佐組阿弥陀寺住職
著書『大悲に生きる』『真実の救い』他

いのちとの出遇いということで思い起こすのは、朝鮮戦争が起こった頃、福岡県で戦争反対運動をしていた時に、私は病気をしたんです。その時、炭鉱で働いている人が、「どうかここで休んでください」とお世話をしてくださいました。

そこは、二つの部屋しかない長屋で親子四人で住んでおられたのですが、「何にもできませんが」と言って、部屋と布団一組を私に貸してくださったんです。何日か経って、何気なく隣の部屋を見ると、敷布団を子供二人が、掛け布団を夫婦がかぶっていたんです。布団が二組しかなかったわけです。私はびっくりして言葉につまってしまいました。それでもその家族は、ひと月ぐらい私の面倒を見てくださいました。そのようなすがたを表しているようないのち。

後から考えると、夫婦げんかをしたり、いろんなことを心配し、悩む。そういう凡夫の中に生まれ出てくるいのちが、阿弥陀のいのちなんだなあと今は感じます。また、そういういのちと生きてきた人々と共に歩いてきた人が親鸞聖人だったんだなあと今は思います。

あいあう

「あいあう」の「あい」は「値」、「あう」は「遇」、「値遇」ということではないかと思います。出遇ったことに値する、しかし出遇ったことに本当に値しえているかといえば、必ずしもそうではない。出遇ったことに、今、改めて出遇い、出遇いが深まっていく。そのことが本当の出遇いであり、生涯出遇い続けていく人生を送れるとしたら、それが本当のいのちとの出遇いになるのではないか、そのようなことを最近感じています。生命は、男性と女性のエネルギーによってようやく誕生するんです

いのちからの呼びかけ

森崎 私は韓国で生まれて戦争末期に福岡女専に留学、寮に入りました。一面の焼け跡をめそめそ泣きながら歩いていた頃、宗正元さんのお宅に泊めていただいたんです。母上と妹さんがいらした。

昨年の夏、七十代半ばにして、ふとした経験をしたんです。「いのちあいあう」という言葉に私も出遇っているのかなあって。

朝目が覚める前に、どこかで自分の体がささやくんですよ。「今生まれたよ」って。「おや、私やっぱり魚なのね。ちいさなこと…」。やがて目が覚めた。何か奇妙な、個体や時空を貫いている生命のリズムにふれたような。そして、はっとしたんです。つらくて言葉にならない、弟の自死。仕事仲間の女性を性暴力で失った責め苦。北へ南へ、と平凡に生きたご年輩の方々に話を聞く旅をしながら、「生き直したい」と願ってきたけど、あの一期一会の方々のいのちに抱かれていたのね、と。宗正元さんと並ぶのはおっかないの。いつまでもさまよう私には。でも永い歳月を、いつも、変りない道案内をいただいたんです。

二人で生む

戦後、父が久留米に引き揚げた後に私に話してくれた言葉がとても印象に残っていて、時々思い出すんですけど、こんな言葉だったんです。

その時私はお腹に長女を宿していたんですが、ちょうど父が亡くなる前、見舞いに行った病院のベッドで父が、「人のいのちっていうのは母親の胎内に十カ月いて、

生命は、男性と女性のエネルギーによってようやく誕生するんです

1927年生まれ。作家・詩人
詩集『さわやかな欠如』『地球の祈り』他。著書『からゆきさん』『大人の童話・死の話』『いのち、響きあう』『いのちへの手紙』他多数

森崎 和江さん
（もりさき　かずえ）

だんだんと人になるんだよ。そうして十カ月経って、やっとこの世にいのちをいただくんだ。いのちが終わる時も、十カ月くらいかけて亡くなっていくってことはごく当然のことなんだ」って。その時、悲しみというより何か光がパーッと差したように「父なるものの声を届けてくださってありがとう」って思いました。

人間の性の機能は、男性と女性で違います。だからこそ生命は誕生しつづけました。性差別の歴史は深くとも、私は、性や民族などの違いを受けとめ合う文化を育てたいんです。

長女が生まれる頃、私は相手に相談したんです。「"大日本帝国"っていう名も"日本"に変わった新しい時代の子よ。二人で生んで二人で迎えたいの」。そして「それが本当のお産バイ」っていう助産婦さんに二人で生ませていただいたの。その子を側に寝かせて、夜明けまで「あなたはだれのものでもない、あなたはただあなたのもの。春の光があなたに触れてあなたを伸ばす」って、私の中の母なるものと言いますか、そんな言葉が繰り返し出てきたんです。

地球は病気だよ

そういう体験を経て、子供たちが四つか五つの時に、生まれるとか死ぬとかっていうことを話すようになったんです。ある時、上の子が夜中にシクシクと泣くので、「こわい夢見たの？」って言ったら、しばらくして、「ママ、死ぬのこわくない？」って聞いてきたんですね。私びっくりしました。あんな小さな子供が、私がいつも感じているようなことを私に届けてくれたことにショックを受けたんです。何と答えようかと思ったんですけど、体がガクガク震えて「ママもこわいー！」って泣いちゃったんです。「ごめんなさい」って言う声も出ないくらい打ちひしがれてたら、その子の小さな手が私の背中をなでて、「ママ、もう大丈夫だからね」って言ったんです。

下の子もそのくらいの歳になったある日、ご飯の時に、お魚焼いたんですよ。それを見て、「このお魚さっきまで生きてたんでしょ？」って。その時も私は「そのお魚もさっきまで生きててそのじゃがいもさんもキャベツさんもさっきまで生きてたのよ」っていう返事しかできなかったんです。

それから孫がやはり5歳の頃「なぜ大人は知らないんだろ、地球は病気だよ。テレビが言ってるのに。ああ、また樹を切ってる」ってつぶやくの。幼稚園へ送って行く道で。自問自答みたいに。大人は知識化止まり。幼児は、いのちとして感受してるんです。

同じように大人の私は、今この場にいのちを生き抜こうとされる方々に囲まれてるからこそ「いのちとは？」「あいあうとは何？」とわが身に問いかけてるんですね。

対談

一つのいのちを生きているということ

―性の問題について、少しお聞きしたいのですが。

宗　森崎さんは『第三の性』という本を書いてますね。何ですか、第三の性って？

森崎　ヨーロッパの哲学者ボーヴォワールが『第二の性』っていう本を書いているんです。それはち

ょっと違うな、と。性とは「彼と私」でなくて、もっと広いって言いますかどう言っていいのかわかんないんですよ。いのちだもの。それで仕方がないので『第三の性』にしちゃいました（笑）。

宗　この頃、男とは、女とは、ということがよく取り上げられていますが、凡夫ということは、ほとんど取り上げられませんね。

　また、いのちを与えられていると言いながら、そのいのちの願いを見失っていることが多いですね。男がどうだ、女がどうだという問題を取り上げる時に大事なことは、私たちに与えられているいのちに立ち返って、そのいのちの願いを通して考えるということではないですかね。

森崎　凡夫の自覚は、長い間の苦悩を経てこなければ言葉で終わりがちですものね、今の社会は。私が子供の頃の国語、歴史の教科書等を通して教え込まれたのは、女は自然で男は文化で、女は業があるということだったんです。この教科書を国は他民族へも押しつけました。が、それは国や親の責任というより、私のいのちの苦しみとなりました。

　宗さんの、自分をいただく、自分を受けとめるっていう言葉の中に含まれている意味は、よくわかるんです。それは、日本中を歩きながら私もそういう方々によって助けられてきましたから。今日も皆さんのお集まりのこの場に支えられてわが身をさらして、やっとなんですよね。

―男と女というよりも、その男と女の間にある性と言いますか…。

森崎　私が性って言った場合は、私のいのちなのよね。つまりいのちっていう時に人間はそれぞれの性を宿して、つまりいのちのエネルギーって言ったらいいのでしょうか？私が『無名通信』という通信を始めたのは、「女って何だろう、性とは何だろう？」ということが問いたかったからです。

宗　生活の原動力や、主体になるようないのちは出遇うものじゃないですか。性の場合もそうですよね。性は身についているものであり、出遇うことを通して、限りなく深められていくものでしょう。一昨年の夏に、生まれ故郷に久しぶりに帰った時に、私の少年時代のことを知っている八十歳くらいの方々が「懐かしかあ」って言うのならわかりますが、まだ五十代、四十代の方で、私に初めて会った方々が「懐かしかあ」って言うんです。その時に、「いのちに遇うって、こういうことじゃないかなあ」って感じました。人に会って懐かしいと感じるようなことが、身についている性ではないですかね。森崎さんが「性はいのち」って言われるのもそういう意味があるんでしょうね。

―いろんな人を尋ねることが自分を尋ねるということになっていくんですね。

宗　そうだと思うよ。

―最後に、森崎さんの著書『見知らぬ私』の中で出てくる、「どうぞ生きてるうちに楽しい男と遊べますように」についてお聞かせください。

宗　「すっぽんぽんで歩きたい」って、森崎さんは言ってるよ。僕も、そうしたいね。

森崎　この頃いのちが商品になってるでしょ？　それから私たちの生活も政治性と経済的な効率とで評価されたりするでしょ？　そういうの嫌なの、私、肩書なんていらないし。「いのちなんだから、それでいいじゃないの～」って。楽しくない男と遊んでどうするの？

　でもね、生命体の商品化が激しくなる社会で孫世代が懸命に自分を見つめているんです。夜も昼も。大人世界のエゴの了解や対立のあちらで。切なくて。せめて社会的父性・社会的母性で子供たちの生きる場を守ってやれないかなって。正元さん、今日は本当にありがとうございました。

　この女性室公開講座の報告は『同朋新聞』4月号に掲載されたものを転載いたしました。

教区のうごき

富山教区　あいあう会

昨年9月、教務所からの文書で、その時は仮称であった「女性問題研修会」のメンバーになってほしいとの要請を受けました。いきなりのことで面喰らったのですが、以前、教区坊守会の委員もしていたこともあり参加することにしました。

どんなメンバーなのかも知らず、出席してから、各組から男女1名ずつと現在女性室のスタッフをしている1名の合計11名であることを知りました。

メンバーの女性たちは、「女性問題」という会の名前だから、「坊守問題」に取り組むのだろうかというぐらいで、あまり違和感なく集まったのですが、男性たちは「なんで僕が？」と「女性問題」にどうして男性が呼ばれるのかという感想を持ったようです。「居心地の悪さを感じる」という発言もあって、それには女性たちが「へぇー」と驚くという、そういうやりとりが会の始まりでした。

1996年、制度上の男女格差が撤廃され女性住職が誕生することになったのにともなって、いわゆる「坊守問題」が浮上してきました。「坊守問題」はそのまま「住職問題」といえると思うのですが、当時は、そういう広がり方はしませんでした。男性たちは「坊守問題」は坊守が考えればよいと、全く“我関せず”の態度をとり、女性たちはいったいどう考えればいいのかと、時間制限のあるあわただしさのなかで、アンケート調査をしたり、各組で考える場を持ったりしたのですが、結局、「坊守問題」は「住職問題」であるという視点ははっきりすることなく、ひと騒ぎしてそのまま鎮まってしまったという感じでした。

そんな反省もあってか、「女性問題研修会」は、寺に生活する30、40代の男性と40、50代の女性（坊守）という構成で、何とか会の名前を「あいあう会」と決め、話し合いが始まりました。

あらためて、このように男女が一緒にゆっくりと話し合う場が、今まで教区にあっただろうかと考えてみると、ほとんどなかったことにびっくりします。教区教化委員会や青少年教化小委員会に、坊守会の会長、副会長が加わるという形での参画はあっても、本音で意見を言い合う場は全くなかったと言ってよいと思います。

大勢の住職のなかに、例え、坊守が1人2人入っても、それこそ「居心地の悪さ」だけがあって、意見どころではないのです。そういう意味で、この会のようにメンバーを男女半々で構成するということは、とても大切なことだと感じました。

男女が同じ場で、同等に責任を担って歩むということが、まだまだできにくいところにあるのが「寺」の現実ですが、意識的に一人ひとりが考え、話し合う場が継続していくことが大切だと思っています。

この「あいあう会」の波紋が、教区内に広がっていくことを願って、歩み出しました。

（富山教区「あいあう会」　野田靖子）

本の紹介

BOOKS

『石牟礼道子対談集―魂の言葉を紡ぐ―』

河出書房新社　定価3200円

「人間は滅びの方へ行ってしまうかも知れないけれど、水俣の患者さんたちを見ていると、何か人類に残せる言葉というのがあるんじゃないかという気がしています。あれほどの絶対受難にあわれた人たちが、人間を見捨てないで、これから人を見つけたいとおっしゃるんですものね。人間がいるにちがいないって。そういう人たちと魂を通じ合わせたいとおっしゃっている。」

本書の中で『「魂たち」の海』と題された加納実紀代さんとの対談での一節です。水俣病患者の人たちのなかから発せられた魂の渇望ともいえる言葉「人を見つけたい」。これはまた、すべてが病んでいるこの世界を生み出してきた私たちにむけた強烈なメッセージであり、そこに見出されたかすかな希望でもあります。

私たちが見失ってきたことが何だったのか、そして何を求めるために生まれてきたのか、私という存在の根拠が問い返されるそんな一冊だと思います。

『ジェンダー・フリーはとまらない！ ―フェミバッシングを越えて―』

上野千鶴子／辛淑玉著　松香堂書店　定価900円

フェミニズムのオピニオンリーダーとしての上野千鶴子さん。そして、マイノリティーの人権問題で鋭い発言と積極果敢な行動を打ち出されている辛淑玉さん。2人の講演とＮＰＯ法人フィフティ・ネット（女性と政治・政策センター）が行った設立記念フォーラム「してはいけないジェンダー・フリー？」でのトークをまとめたものです。両者それぞれの立場から元気のある歯切れのよい切り口で語っています。

ゆらぎ

～もぜなぁ～

石川純子

二十三年間通って教えを受けたまつをお婆さんの聞き書きを、一冊の本にまとめた。題して『まつを媼百歳を生きる力』。

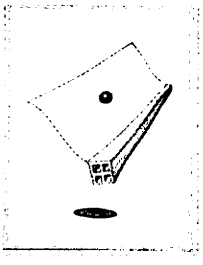
東北の農婦が持つ魂ののびやかさ、深さ、靱さをみんなに知ってほしいと思ったからだ。

たとえばそれはまつを媼がよく口にした一つの言葉からも伺える。ここ東北に「もぜ」あるいは「もぞい」なる方言がある。標準語に訳せば可哀想とか不憫となるのだが、しかし単なる同情とも違う。媼の口から「もぜなぁ」と発せられるや、相手の苦しみと一体になってしまうところがあるからだ。ドイツ語には日本語に訳すと「共苦」という言葉があるそうだが、まさに共苦の発露としかいいようがない言葉なのである。しかもその思いは人間だけでなく生きものすべてに及ぶから、たとえばケガした牛などに会おうものなら、「なんたら（なんと）、お前、足こ痛めたってか。もぜなぁ」と、わが身も病むように、媼は牛の痛みと同化してしまう。同情などという感情以前に、牛のいのちと媼のいのちが共振、共苦しているとしかいいようがないのだ。

まつを媼はまた、「いのちというものは天からいただいているのだ」と言いつづけた人だった。人も獣も植物も等しく天からいただいたいのちなら、いのち同士が感応するのは当然だ。そのいのちが損なわれ病んでいるのなら、なおのこと感応しないはずはないだろう。そのとき発せられるのが、「もぜ」なる言葉ではなかったのか。 いのちを私物化し、個我だけを肥大させてしまった私たちには持ちようのない心なのだろう。その証拠に「もぜ」なる言葉も、八十代の人たちを最後に死語となってしまった。

まつを媼が百年を生きた農村で、最もいのちが損なわれていたのは農家の嫁だった。その「嫁ごの救済」をかかげて闘いつづけた媼。そのエネルギーの源は、「もぜ」なる言葉が孕んでいた「共苦」にあったのだ。

（いしかわ　じゅんこ・岩手県在住）



表紙の絵

テーマ「ずっと向こうまで」　　**アーティスト：日比野克彦さん**

1958年岐阜市生まれ。1982年東京芸術大学を卒業。その年、立体感のあるダンボールを用いた作品で第3回日本グラフィック展大賞を受賞し注目される。

今年のサッカーワールドカップの公式ポスターを制作するなど、日本のアートシーンを代表するアーティストとして、幅広い形態の作品を通して、常に時代と交信しながら進化し続ける表現世界を展開している。

『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典159頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしましても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあって、わたしたちが“生きる”ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあってこそ“生きる”ということがなりたっているといっても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかったり、行き違ったり、そのためにいろいろな出会いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出遇いを積み重ねていきたいと思います。

●女性室活動報告

＜スタッフ派遣＞	1月24日	内閣府・滋賀県主催「男女共同参画フォーラムin滋賀」への参加
	2月22日～23日	京都教区山城第2組坊守研修会への参加
	3月20日	長浜教区坊守会連絡協議会学習会への参加
	3月26日	仙台教区教化委員会学習会への参加
	4月17日	山陽教区第4組寺族研修会への参加
	4月25日	奥羽教区同朋会議への参加
	5月16日	久留米教区男なり女なり委員会公開講座への参加

＜2001年度女性室公開講座　女たちと男たちの寄り合い談義パート5＞

6月22日　富山会場　講師：伊藤公雄さん（大阪大学人間科学部教授）　会場：富山別院

おしらせ

女性室ポスター、リーフレットをご活用ください。

私たちの宗門における制度のあり方や教えの内容を一つひとつ問い返してみますと、男性中心の歴史を刻んでいるといえます。その男性中心の現実のなかで、はたして男性と女性はほんとうの出会いをし得ているといえるのでしょうか？「女だから」「男だから」という「ジェンダー（本来的ではなく、社会的・文化的につくられた固定的な役割分担としての性の違い）」に縛られるのではなく、男であれ女であれ、かけがえのない一人の人間として、それぞれの個性を生かし認めあうことこそが、御同朋としての人間の交わりではないでしょうか。

女性室ではこのような課題を多くの方々と共有したいという思いから、ポスターとリーフレットを同時に発行いたしました。多くの方の目にとまるようアピールを重視したデザインにし、あわせて活用していただきたいと願っています。

ご希望の部数をお送りいたしますので、同朋の会をはじめ、寺院・教会あるいは地域での行事などでの配布にぜひご協力ください。

編集後記

先日、道の途中のガソリンスタンドに「オイル交換の際、男性は途中まで自分で作業をしてください」という看板があった。えっ、どうして？得意な女の人もいるだろうし、そうではない男の人もいるはずなのに、と思った。◆女性室に関わらせていただいてもうすぐ3年を迎える。以前の私の中にはこんな感覚はなかった。女性である私がお茶くみをすることに何の抵抗も感じなかったし、「ジェンダー」の意味もわからず女性室会議の時も「？」が頭の中を何回めぐったかわからないほどだった。◆女性室での活動を通して、いろいろな人に出会ううち、今までの自分のままでいいのかと思いはじめ、女であることが自分のすべてだと思うがゆえに「女らしさ」に縛られている私自身や、自分が他者のことを考える時に、「男らしさ」や「女らしさ」というフィルターを通してしか考えることができていなかったのではないかということを気づかされた。◆それから私は「女って何？」「男って何？」「人間って何？」「私って何？」ということが気になってしようがない。だから、目の前にある現実と向きあったとき、腹がたってわめいたり、時には悲しくなって落ち込んだりして周りの人たちにたくさん迷惑をかけながらドタバタもがいている。◆自分らしさと出会うためのもがきかもしれないが。（沙。）

女性室広報誌『あいあう』第12号

発　行　2002年7月1日
発行人　三浦　崇
発行所　真宗大谷派宗務所　組織部女性室
〒600-8505　京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町
Tel 075-371-9187　Fax 075-371-9194